



# 新風

平成21年10月1日付けで本学へ赴任、昇格された方に自己紹介をしていただきました。

## 筑紫病院整形外科教授 柴田 陽三



皆様こんにちは。平成二十一年十月一日付けで福岡大学筑紫病院整形外科教授を拝命しました柴田陽三と申します。私は福岡大学を昭和五十六年に卒業し、福岡大学医学部整形外科教室に入局しました。一年目は大学で、二年目は国家公務員共済組合会浜の町病院の整形外科で臨床研修を行いました。三年目に大学院に進み、人間が覚醒した状態での肩の動態関節内圧を測定する方法を開発し、博士号を取得いたしました。その後、本研究を英国の Churchill Livingstone から発

刊された教科書に分担執筆する榮譽に授かりました。大学院卒業後は二年間、救急医療に携わり、平成元年十月より福岡大学病院に助手として戻って参りました。平成五年に講師、平成十七年に助教に就任し、この度、筑紫病院整形外科教授に就任いたしました。臨床では一般外傷と肩関節外科学に携って参りました。肩

関節は、野球をはじめとする球技で故障を起こすことが多く、数多くのスポーツ選手の治療を担当いたしました。なかでも某球団の二軍選手三名に関節鏡下手術を行い、その後一軍昇格を果たすことができました。私は臨床研究を主体に行っており、この度、これまでに二、五〇〇例を超える肩関節外科の執刀経験（一般外傷・骨折は他に一、〇〇〇例ほど）があります。近年、外科医に取りまして訴訟を含めて非常に強い臨床研究を推進させると同時に、教室員が世界水準のスキルに到達できるよう手術習得システムを開発中です。現在、模型を用いた関節鏡視下手術のトレーニング講座や、ハワイ大学と提携して新鮮凍結屍体を用いた関節鏡視下手術トレーニング講座を行っております。今後は、筑紫野地区の整形外科医療の一層の発展のため尽力を尽くして参りたいと思っております。皆様には今後ともご指導・ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

赴任後の抱負を書かせていただきました。今回は赴任後の小児外科の変化についてご紹介したいと思います。小児外科担当の医師は現在、私を含め常勤医三名（他に大学院生一名）で、診療を行っております。私が赴任後一番思ったことは、何より外来患者数、入院患者数、手術件数のすべてを増やすことでした。廣瀬先生、岩崎先生を始め、関連する先生方のご協力を得て、二〇〇九年は七月以降少しずつ患者数の増加があり、十二月までの延べ患者数は、前年に比べ、外来患者数が約二倍、入院および手術患者数は約二倍に増加することができました（手術件数は二〇〇九年一月～十二月で一五二例となりました）。手術内容も、鼠径ヘルニアや急性虫垂炎などの common disease は約五割で、小児外科領域では major operation とされる、胆道閉鎖症、ヒルシュスプルング病、鎖肛（中間位や高位）、臍腫瘍などや、新生児での食道閉鎖症、仙尾部奇形腫なども手術することができました。まだまだ、十分な患者数ではないのですが、丁寧な診療を行って、患者数増加と経験の積み重ねをしていきたいと思っております。

私の目標は、小児外科診療においても高度で安全な医療ができるよう努めることと、福岡大学病院の躍進に少しでも貢献できればと考えています。近い将来、福岡都市圏西側の主要な小児医療機関である福岡市立こども病院が東区に移転するため、当院の小児医療における重要性はますます高まってくると思われまします。このような社会環境の変化にも十分に対応できる診療を行いたいと思っております。総合周産期母子医療センターの先生方、小児科の先生方、呼吸器・乳

腺内分泌・小児外科の先生方にも協力をお願いしながら、頑張りたい次第です。これからもどうぞよろしくお願ひ申し上げます。総合周産期母子医療センター 吉里 俊幸

## 総合周産期母子医療センター 吉里 俊幸



平成二十一年十月より総合周産期母子医療センター准教授に昇格させていただきました。現在は、同センターの副センター長も兼務させていただいております。昭和六十一年九州大学医学部を卒業しました。九州大学産婦人科一般臨床とともに、産婦人科一般臨床として中核ヒト胎児を対象として中枢神経系制御からみた胎児心拍数変動と胎児行動学を中心とした胎児生理学に関する研究を行ってまいりました。その後、国立病院九州医療センター等を経て、平成十四年から福岡大学にお世話になっております。赴任後九年目を迎えますが、福岡大学では一貫して周産期領域における臨床、研究に従事してきました。日本産科婦人科学会認定医以外に日本超音波医学会認定超音波専門医、臨床遺伝専門医、日本周産期新生児学会暫定認定超音波指導医等取得に所属してまいりました。授業が終了すると夜遅くまでグラウンドで汗を流し、朝練も行う、休日は他大学と練習試合をするといった野球漬けの生活でした。五年生の学生実習（第一外科）で肝臓に興味を持ち、卒業後、福岡大学医学部第一内科（奥村尚教授）に入局しました。そして坂口正剛先生の下で主に超音波検査を

中心とした肝疾患の診断と治療を行ってまいりました。その後先生の推薦で一九八九年から二年間、第一外科の池田靖洋教授（現福岡大学名誉教授）、眞栄城清先生に ERCP を中心とした胆膵疾患の内視鏡診断と治療について御教授して頂きました。肝臓学以外に胆道・膵臓学を学ぶことで視野を広げることができ大変有益でした。その後一九九二年十二月から福岡大学筑紫病院消化器科に移動し、八尾恒良教授、坂口先生の御指導の下で、肝胆膵疾患を担当し、肝細胞癌に関するテーマで学位を取得しました。現在、松井敏幸教授の下で超音波検査や胆膵内視鏡検査を用いて肝胆膵疾患の早期診断と低侵襲治療を行っています。筑紫病院は老朽化していますが、現在岩下明徳病院長の下、新病院の建築準備は着実に進行しています。地域医療支援病院として地域の先生方と緊密に連携し、特に専門分野の肝胆膵領域で地域医療により一層貢献したいと思っております。研究面においては臨床研究が中心ですが、今まで私を教育してくださった諸先輩方の臨床のノウハウや検査・治療技術を、さらに発展させ、一子相伝ではなく多子相伝でひとりでも多くの後輩に伝授し、人材育成に努力して行きます。臨床医として必要な各種学会の認定医、専門医も取得できるように指導してまいります。学生教育は臨床実習が中心ですが、医師国家試験に直結する教育実習や講義を行い、ひとりでも多くの学生が国家試験に合格するように努力します。今後とも御指導、御鞭撻の程、宜しくお願ひ申し上げます。

私は、一九七九年に福岡大学医学部医学科に入局した第八回生です。学生時代は六年間準硬式野球愛好会に所属してまいりました。授業が終了すると夜遅くまでグラウンドで汗を流し、朝練も行う、休日は他大学と練習試合をするといった野球漬けの生活でした。五年生の学生実習（第一外科）で肝臓に興味を持ち、卒業後、福岡大学医学部第一内科（奥村尚教授）に入局しました。そして坂口正剛先生の下で主に超音波検査を

このたび、松井敏幸教授の御推薦により、平成二十一年十月から、福岡大学筑紫病院・内視鏡部の准教授を拝命しました。私は、昭和五十八年九州大学医学部卒で、卒業後は、東京女子医大で学びました。平成元年から、福岡大学筑紫病院・消化器科に入局し、消化器診療・画像診断・病理診断の修練を積み、平成十二年十月から、消化器科の講師に就任しました。これまで、一般の消化器の診療を行いながら、常に、患者さんの診療に必要な最新の消化器内視鏡の診断・治療技術を当科に導入し、また自ら開発してきました。平成十七年四月から二年間、英国の Nottingham 大学医学部から Visiting Assistant Professor として招聘を受け、在外研究員として福岡大学から派遣して頂きました。渡英する際には、試験を受け英国の医師免許を取得し、自ら実際の臨床の現場で、英国の消化器内視鏡医を指導し、共同研究を行いました。欧米で、従来まで診断できなかった Barrett's 上皮由来の早期食道腺癌の診断体系を確立することができました。日本の臨床医から大学人の人生の中で、通常では得ることができない経験ができ、在外研究員として出張させて頂いた福岡大学に心から感謝しています。

このたび、松井敏幸教授の御推薦により、平成二十一年十月から、福岡大学筑紫病院・内視鏡部の准教授を拝命しました。私は、昭和五十八年九州大学医学部卒で、卒業後は、東京女子医大で学びました。平成元年から、福岡大学筑紫病院・消化器科に入局し、消化器診療・画像診断・病理診断の修練を積み、平成十二年十月から、消化器科の講師に就任しました。これまで、一般の消化器の診療を行いながら、常に、患者さんの診療に必要な最新の消化器内視鏡の診断・治療技術を当科に導入し、また自ら開発してきました。平成十七年四月から二年間、英国の Nottingham 大学医学部から Visiting Assistant Professor として招聘を受け、在外研究員として福岡大学から派遣して頂きました。渡英する際には、試験を受け英国の医師免許を取得し、自ら実際の臨床の現場で、英国の消化器内視鏡医を指導し、共同研究を行いました。欧米で、従来まで診断できなかった Barrett's 上皮由来の早期食道腺癌の診断体系を確立することができました。日本の臨床医から大学人の人生の中で、通常では得ることができない経験ができ、在外研究員として出張させて頂いた福岡大学に心から感謝しています。

このたび、松井敏幸教授の御推薦により、平成二十一年十月から、福岡大学筑紫病院・内視鏡部の准教授を拝命しました。私は、昭和五十八年九州大学医学部卒で、卒業後は、東京女子医大で学びました。平成元年から、福岡大学筑紫病院・消化器科に入局し、消化器診療・画像診断・病理診断の修練を積み、平成十二年十月から、消化器科の講師に就任しました。これまで、一般の消化器の診療を行いながら、常に、患者さんの診療に必要な最新の消化器内視鏡の診断・治療技術を当科に導入し、また自ら開発してきました。平成十七年四月から二年間、英国の Nottingham 大学医学部から Visiting Assistant Professor として招聘を受け、在外研究員として福岡大学から派遣して頂きました。渡英する際には、試験を受け英国の医師免許を取得し、自ら実際の臨床の現場で、英国の消化器内視鏡医を指導し、共同研究を行いました。欧米で、従来まで診断できなかった Barrett's 上皮由来の早期食道腺癌の診断体系を確立することができました。日本の臨床医から大学人の人生の中で、通常では得ることができない経験ができ、在外研究員として出張させて頂いた福岡大学に心から感謝しています。

このたび、松井敏幸教授の御推薦により、平成二十一年十月から、福岡大学筑紫病院・内視鏡部の准教授を拝命しました。私は、昭和五十八年九州大学医学部卒で、卒業後は、東京女子医大で学びました。平成元年から、福岡大学筑紫病院・消化器科に入局し、消化器診療・画像診断・病理診断の修練を積み、平成十二年十月から、消化器科の講師に就任しました。これまで、一般の消化器の診療を行いながら、常に、患者さんの診療に必要な最新の消化器内視鏡の診断・治療技術を当科に導入し、また自ら開発してきました。平成十七年四月から二年間、英国の Nottingham 大学医学部から Visiting Assistant Professor として招聘を受け、在外研究員として福岡大学から派遣して頂きました。渡英する際には、試験を受け英国の医師免許を取得し、自ら実際の臨床の現場で、英国の消化器内視鏡医を指導し、共同研究を行いました。欧米で、従来まで診断できなかった Barrett's 上皮由来の早期食道腺癌の診断体系を確立することができました。日本の臨床医から大学人の人生の中で、通常では得ることができない経験ができ、在外研究員として出張させて頂いた福岡大学に心から感謝しています。

## 筑紫病院内視鏡部准教授 八尾 建史



筑紫病院の消化器科では、後輩の指導に、もちろん力をつけており、最近では、自発的に演習を応募し、発表するようになりました。毎日、全員で患者さんの内視鏡診断・治療に関して、活発に討論を行っています。他科との連携も重要で、病理部の正確な診断に裏打ちされた内視鏡診断があり、外科のバックアップにより安全確実な内視鏡治療を行うことができます。さらに、最近では、最新の消化器内視鏡診断法を用いて従来では発見困難であった中下咽頭部の早期癌も診断できるようになり、耳鼻科との連携も深まっています。

このように、福岡大学筑紫病院・内視鏡部では、消化器領域に限定せず、他科の臨床家、他分野の研究者とともに、集学的な内視鏡診療を築いて行くことを目標としていきたいと思っております。このためには、チームワークと他の診療部門との密な協力が必ずや必要です。私自身、専門領域を超えた内視鏡医学に貢献したいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

このように、福岡大学筑紫病院・内視鏡部では、消化器領域に限定せず、他科の臨床家、他分野の研究者とともに、集学的な内視鏡診療を築いて行くことを目標としていきたいと思っております。このためには、チームワークと他の診療部門との密な協力が必ずや必要です。私自身、専門領域を超えた内視鏡医学に貢献したいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

年に大阪大学を卒業後は同大学の形成外科教室に入局しました。臨床では大阪府内の関連病院をいくつか回り、研究では外来異物や低酸素のリセプターの転写因子として Anti-遺伝子というものがあ

このように、福岡大学筑紫病院・内視鏡部では、消化器領域に限定せず、他科の臨床家、他分野の研究者とともに、集学的な内視鏡診療を築いて行くことを目標としていきたいと思っております。このためには、チームワークと他の診療部門との密な協力が必ずや必要です。私自身、専門領域を超えた内視鏡医学に貢献したいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

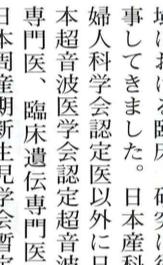
このように、福岡大学筑紫病院・内視鏡部では、消化器領域に限定せず、他科の臨床家、他分野の研究者とともに、集学的な内視鏡診療を築いて行くことを目標としていきたいと思っております。このためには、チームワークと他の診療部門との密な協力が必ずや必要です。私自身、専門領域を超えた内視鏡医学に貢献したいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

このように、福岡大学筑紫病院・内視鏡部では、消化器領域に限定せず、他科の臨床家、他分野の研究者とともに、集学的な内視鏡診療を築いて行くことを目標としていきたいと思っております。このためには、チームワークと他の診療部門との密な協力が必ずや必要です。私自身、専門領域を超えた内視鏡医学に貢献したいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



## 総合周産期母子医療センター 増本 幸二

平成二十一年十月より、当大病院総合周産期母子医療センター外科担当の准教授に昇任させていただきました。同年四月に当大病院に赴任後、総合周産期母子医療センターの廣瀬先生、呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の岩崎先生を始め、各科の先生方に大変お世話になっております。



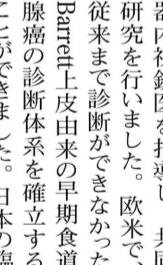
## 総合周産期母子医療センター 増本 幸二

平成二十一年十月より、当大病院総合周産期母子医療センター外科担当の准教授に昇任させていただきました。同年四月に当大病院に赴任後、総合周産期母子医療センターの廣瀬先生、呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の岩崎先生を始め、各科の先生方に大変お世話になっております。



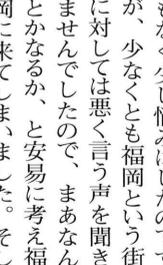
## 総合周産期母子医療センター 増本 幸二

平成二十一年十月より、当大病院総合周産期母子医療センター外科担当の准教授に昇任させていただきました。同年四月に当大病院に赴任後、総合周産期母子医療センターの廣瀬先生、呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の岩崎先生を始め、各科の先生方に大変お世話になっております。



## 総合周産期母子医療センター 増本 幸二

平成二十一年十月より、当大病院総合周産期母子医療センター外科担当の准教授に昇任させていただきました。同年四月に当大病院に赴任後、総合周産期母子医療センターの廣瀬先生、呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の岩崎先生を始め、各科の先生方に大変お世話になっております。



## 総合周産期母子医療センター 増本 幸二

平成二十一年十月より、当大病院総合周産期母子医療センター外科担当の准教授に昇任させていただきました。同年四月に当大病院に赴任後、総合周産期母子医療センターの廣瀬先生、呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の岩崎先生を始め、各科の先生方に大変お世話になっております。



### 祝 福岡大学医学紀要36巻 優秀論文賞

高橋 宏昌 (歯科口腔外科)  
Assessment of Three Bilateral Sagittal Split Osteotomy Techniques with Respect to Mandibular Biomechanical Stability by Experimental Study and Finite Element Analysis Simulation

許斐 一郎 (博腎会病院)  
Characterization of a Persistent Chlamydial Infection and the Role of Toll-like Receptors in the IL-6 Secretion in Chlamydia Trachomatis-Infected Human Synovial Fibroblasts

### 教室紹介 内分泌・糖尿病内科学

当科は平成二十一年四月から新設講座としてスタートいたしました。常勤診療スタッフは二十二年一月の時点で、安西講師が異動し、教官四名(柳瀬、明比、蘆田、工藤)、助手四名(竹下、永石、目連、橋本)の総勢八名ですが、糖尿病専門医四名、内分泌専門医三名を擁し、バランスのとれた陣容と自負しています。他、非常勤として吉田医師、研究員として米村医師に診療をサポートしていただいています。科全体が共通認識のもとに診療し、科の実力を底上げしていくために、「知識の共有」

拡大・発展」を科のスローガンとして掲げています。科の立ち上げに際しては、教官一同の奮闘、努力のおかげで、診療、教育、研究のすべての面で、順調に船出することができました。この一月には、安西講師が福岡市南西部の中核施設であるグロウバルFUIのプロジェクトの一環として地域の糖尿病医療連携を推進する役目を担っています。その基盤作りの一環として、城南区を中心に福大周辺の先生方との勉強会を通じて顔の見える形でのネットワーク(F-WIND)を構築しています。また、最近の特筆すべき出来事として、全国的にも初めての試みと思われるフットケアの市民公開講座「足元から健康に」

を一月十七日(日)に天神エルガーラで開催し、全国の医療靴屋さんやメディアも巻き込んだキャンペーンが功を奏し、三、五〇〇人の多数の市民の方々が、講演や各種相談ブース、展示に足を運んでいただきました。この成功は、院内フットケア研究会の当科の安西、竹下医師、心臓外科の竹内医師らが中心となり、フットケアチームの各医師、看護師、栄養士など福大病院の多くの部署が一致団結、協力し合っただけでなく、当科の役割の一つとして生活習慣病の予防や克服のための「自助努力」の大切さを理解、啓蒙していただくことを重要と考えており、ふだんの「糖尿病教室」はもちろんですが、「アンチエイジング」の観点からの市民公開講座(昨

年十月十二日、A棟にて開催)や研究会の開催(本年四月十八日に大慈弥教授と共催予定)にも積極的に取り組んでいます。研究面では、昨年、八月にようやく待望の実験室が完成し、アンチメタボの創薬研究等を開始していましたが、成果はまだまだこれから状況です。私自身も、虎の子の大学院生の村瀬君を育てるべく、研究生の金子さんとともに、輪読会、抄読会やデータカンファレンスを通じて、コピー片手に時々、サイエンスの香りを楽しんでいきます。詳しくは当科のHP <http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/interna/>を参照いただければ大変幸いです。(文責 柳瀬 敏彦)

### 教室紹介 再生・移植医学

当講座は膝関節移植医療を臨床業務とし、他に学部生・院生の教育をはじめ、様々な研究テーマに取り組んでいます。安波教授は福岡大学グループFUIプログラムを主宰し、基礎・臨床講座とseedlingからtranslational research、臨床糖尿病研究に至るまで、幅広い視野でプログラムを展開中です。

臨床膝関節移植はI型糖尿病に対する新しい治療法として、国外では二〇〇〇年に、国内では二〇〇四年に開始されました。九州では二〇〇六年十一月に第一例目が福岡大学病院で実施されています。日本では認定施設が六施設に限られており、福岡大学病院は、京都・大阪

大学以西唯一の認定施設であり、主に九州・沖縄の実施病院となっています。その後移植は細胞の単離に使用し、消化酵素に狂牛病感染の懸念が持たれたため一時世界的に中断していましたが、先ほど再開が決定されています。また現在認定施設間で、文部科学省の橋渡し研究が行われ、新規免疫抑制療法を併用する臨床膝関節移植の開発を進めています。

膝関節移植は細胞移植であるため、研究分野では遺伝子導入や再生医療など様々な細胞修飾を加える事が可能で、そのため基礎研究分野が最も臨床上に反映する事が出来る分野の一つであると思われる、今後の治療展開が期待されています。福岡大学は、京都・大阪

閉塞的かつ慢性的なドナー不足を迎えています。そしてこれらの環境を打破するには、幹細胞移植をはじめとする再生医療の整備が急務となっています。教室でも再生医学分野に関しては、現在ヒトおよびマウスのiPS細胞単離培養室が完備し、本格的に臨床応用に向け標的細胞への分化誘導を開始しています。他にも胚性幹細胞・体性幹細胞研究は、以前より研究レベルで成果を認めており今後臨床展開を念頭において展開しています。

教室の業績に關しましては、免疫寛容への誘導、NK T細胞を介した移植時免疫応答、早期移植細胞傷害からの回避、体性幹細胞誘導、幹細胞研究、組織工学的再生など、高い国際的評価を得ています。また今年その中でも、早期移植膝関節の傷害からの回避に関する研究が「Chin J Orthop」に発表され、新たな診断治療の可能性を含むアブ

ローチとして先ほどプレスリリースも行われています。今後は臨床膝関節移植を中心として、更なるニーズにも応えるべく多角的、横断的な研究・臨床プログラムにも対応して行きたいと考えています。(文責 小玉 正太)



【スタッフ紹介】  
教授: 安波 洋一 実験補助員: 川口 智美、金丸 久代  
准教授: 小玉 正太 秘書: 中島 典子、金城 亜哉(移植コーディネーター)  
助教: 松岡 信秀、内藤 雅康 医学部研究棟 本館3F  
大学院生: 米良 利之、小島 大望 内線 (3631)  
技術支援者: 矢野浩太郎、小方 貴子 留学 中: 伊東 威(Baylor University, Dallas, TX)

## 第61回福岡大学医学会例会 報告

日時/平成22年3月5日(金) 17時~18時20分  
場所/医学部臨床大講堂

【進行】集會幹事 三宅 吉博

- 1) 開会の辞 集會幹事 三宅 吉博
- 2) 会長挨拶 医学部長 黒木 政秀
- 3) 新任教授講演 座長...黒木 政秀
  - ①講演者...宮本 新吾(産科婦人科学教授)  
「医師主導治験による卵巣癌標的治療薬の開発」
  - ②講演者...柴田 陽三(筑紫病院整形外科教授)  
「肩関節鏡視下手術の進歩」
- 4) 福岡大学医学紀要第36巻優秀論文賞授与式  
受賞者 高橋 宏昌(歯科口腔外科)
- 5) 受賞論文の要旨講演  
講演者...高橋 宏昌 座長...喜久田 利弘  
「Assessment of Three Bilateral Sagittal Split Osteotomy Techniques with Respect to Mandibular Biomechanical Stability by Experimental Study and Finite Element Analysis Simulation」
- 6) 閉会の辞 集會幹事 三宅 吉博



講演された先生方を囲んで  
(左から 三宅先生、黒木医学会会長、柴田先生、宮本先生、高橋先生、喜久田先生)

### 学位取得

次の方は、平成21年9月29日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

#### 論文提出による学位取得者

- |                    |                  |
|--------------------|------------------|
| 今任 拓也(衛生学助教)       | 山邊裕一郎(放射線科助手)    |
| 藤井 広志(法医学研究生)      | 高津 典孝(筑紫病院救急部助手) |
| 木村 公美(心臓・血管内科学研究生) | 白石 浩(学外者)        |
| 安部 洋(脳神経外科助教)      | 佐藤 典子(学外者)       |

### 長い間ありがとうございました

(平成21年10月1日~平成22年2月28日までに退職された方)

- 安西 慶三 講師(内分泌・糖尿病内科)
- 近藤 寛之 講師(眼科)

以上、12月31日付け

